

蒙古人における火と爐

青 木 富 太 郎

(文理学部 歴史学研究室)

目 次 は し が き

1. 古代蒙古人の火に対する観念
2. 現代蒙古人の火に対する観念
3. 火と爐との家に対する関係及びその意義
4. 古代蒙古の“爐の王”
5. む す び

は し が き

人類が原始時代からはるか後まで、一部の民族では現在まで、火を神聖視し、これに悪霊・邪気・毒などをはらう力があると信じたことは、よく知られたことである。そして一方では人類が火食をしたことから、必然的に火及びそれがおかれる爐もしくは竈は、家庭もしくは家庭生活の中心となり、火・爐（もしくは竈）又はその両者が家そのものを表徴するようになったことも、すべての民族に共通したことであつた。しかしそれらのことを詳しく観察すると、生活状態によつて、例えば狩猟民・遊牧民・農耕民などによつて、火に対する観念や、火および爐（又は竈）と家との結びつきの状態などはちがつている。遊牧蒙古人において、それがどのようなであつたかを見るのがこの稿の目的である。

1. 古代蒙古人の火に対する観念

人類が他の動物よりすぐれている点の一つに、火の使用があることは、いまさういふまでもないことであるが、火をつくりだすということは、マッチの発明以前には、相当に厄介な仕事であつた。したがつて原始民族の間で火の保存が、家にある人の重要な仕事になつていたことは当然であるが、これに加うるに大規模な山火事や野火の暴威に対する恐怖、野獣類が示す火に対する恐怖についての観察とその利用、食生活に対する火の恩恵などが原因となつて、火を崇拜し、神聖視し、さらにすゝんで悪霊・邪気などをはらう力、きよめる力を火がもっていると考えるようになったことも、又よく知られたことである。このような観念は火が手軽につくられるようになった今日においても、多くの民族、多くの土地に残存している。

古く蒙古高原に遊牧した民族においても、火を神聖視し、悪霊・邪気をはらい、きよめる力があると考えていたことにはかわりはなかつた。それが初めて文献に見られたのは突厥のときである。東ローマから派遣されて569年に突厥の王庭におもむいたゼマルコス Zemarchus の奉使行についての

メナデル Menander Protector の記したところは、アジア遊牧民のいろいろの習慣をはじめヨーロッパに伝えたものとして著名であるが、その中で、一行が突厥人の領土であつたソグド人のもとについたときのことをメナデルは次のように伝えている。

それより彼ら〔突厥人〕は荷物の上で鈴をならし、かつ一種の太鼓をうちならしはじめた。その間、他のものは、バチバチと焰をあげてもえる香のある木の葉を手にもつてそのまわりを走りまわり、狂人のようにかけまわり、悪霊をおいはらうかのような身ぶりをする。彼らの考えでは、これは悪霊調伏の行為なのだが、その間、彼らはなおゼマルコスをして火の中を通らせ、彼らも同様にすることによつて、浄化を達成したと考えたようである。^(註1)

すなわち突厥人の間では火を単に神聖視することから進んで、火に悪霊を調伏したり、けがれをきよめたりする力があると信じていたのである。このような観念が12世紀末に勃興した蒙古民族の間にもあつたことは、当時ヨーロッパから蒙古を訪問した人々の観察によつても明かである。

古代蒙古人が火を神聖視した事例については、カルビ＝ Plano Carpini が最もよく伝えているようである。彼は“善行悪行ということについては、彼ら〔蒙古人〕の間には法は存在しないが、それでも先祖から伝えられたある種の伝統がある。それはある種の行為を悪い行為と断定するものだ”^(註2)として彼らの考える“悪い行為”の数々をあげているが、そのうちに、

一つは小刀を火の中につつこむことや、どんな方法でも小刀を火にふれること、または火のそばで斧で木を切ること。これは彼らの考えによると、こうすれば焰の先が切りとられるからだ。という箇条がある。“焰の先が切りとられる”という文は、“小刀を火の中に入れることや、どんな方法でも小刀を火にふれること”にかゝるものであろうが、小刀を火の中に入れて、ふれたりすることも、火のそばで斧で木を切ること、火を消すおそれがあるというほかに、火を神聖視しているからこそ、このような行為が罪惡とされているのだと考えてよいようである。

さらにチンギス・ハンの大ヤサの一条のうちには、

彼〔チンギス・ハン〕は、その同僚以上に食うこと、炊事の火及び食物をもる皿をまたぐことを禁じたり。^(註3)

とある。炊事の火とは帳幕の中の爐にある火であり、これが神聖視されたことは明かである。

以上は火を単に神聖なものと考えた事例であるが、進んで当時の蒙古人が、火に悪霊・邪氣・毒などをはらう力があると信じていた事例をあげよう。

まずプラノ・カルビニは旅行記中で、バトゥの宿営に到着したときのことをのべて、

宿営に到着すると、彼らのいるところから一里もはなれた地点に天幕をはれという命令を受け、なおその上、宮廷を訪問する前、二つの燃える火の間を通りぬけよといわれたが、これは最初私の方で拒絶した。が、彼らは“何も心配することはない。たゞ敵意をもっているかどうか、あるいは何か毒のようなものでももつてはいらないかと思つて通らせるのだ。火の間を通れば、そんな毒がなくなる”という。それで私たちは“そんなら仕方がない。疑われるのはいやだから、火の間を通りぬけよう”と答えた。^(註4)

とのべ、カルビニの同行者ベネディクト Benedict もこのときのことを、

贈物を求めるので、海狸の毛皮40枚と貔の毛皮80枚をあたえようすると、彼らは“それをもつて二つの火の間を通れ”といつた。二人はその通りにした。外国使臣やその贈物を火できよめるのは彼らの習慣なのである。^(註5)

とのべている。さらにカルビニは、蒙古人のこの習慣について、次のようにまとめたのべている。

彼らは何でも火によつてきよめられると信じている。それで大使や諸侯その他の人々がやつてくると、彼らと彼らのもつてきた贈物とは、きよめられるために火の間を通過しなければならぬ。^(註6) そうしないと、彼らは魔物にとりつかれるか、悪いことや害毒をもたらすからである。

憲宗の即位当時蒙古にきたルブルクは同じような習慣を次のようにつたえている。

宮廷にもちこまれるものは何でも火と火との間を通らせ、その際、係りのものがその中の少量をとります。それから又死人があつたときにも、その寝床を火と火との間にもつて行つて、炙つてきよめます。誰であろうと、人が死ぬと、その持物を火できよめるまでは、他人の手にふれさせないのです。私はこの風習をさきにお話しました夫人が死んだときに親しく見ました。僧アンドリュウ一行は火と火との間を通らされたそうですが、これには二つの理由があつたと思います。ひとつは彼らが贈物をもつていたこと、ひとつはその贈物がすでに死んだグユク・ハン〔定宗〕にもたらされたものであつたことです。私は火の間を通りませんでした。それは贈物を何ももつていなかったからです。^(註7)

ルブルクは又蒙古でメツツ生れの女からきいた話として、次のようなことを伝えている。

このメツツの女はキリスト教徒だつた皇后〔憲宗ムンゲの〕につかえていたのだが、あるときそのオールド〔帳殿〕に高価な毛皮が何枚かおくられたので、例の如く占者がそれをたずさえて火の間を通り、少々余計に分け前の毛皮をとつた。^(註8)

カルビニとルブルクとを比較すると、贈物は必ず火と火の間を通過させられて清められ、この習慣は使臣自体を対象としたものではないことがわかる。贈物をもたぬルブルクは火の間を通過させられなかつた。しかし現実的には、贈物をもたずに蒙古大帝国の支配者のもとへ来るものは殆んどなかつたので、使臣は殆んどすべて贈物をもつたまま、火の間を通過させられたのである。蒙古人の考えによれば、このようにして贈物の中にひそんでいるかも知れぬ悪霊・邪気・毒が除去されたのである。

以上のように蒙古人は、悪霊・邪気・毒などを除去する力が火にあると考えたが、さらに死者によるけがれ、邪気などをはらう力をももつと考えていたことは、このルブルクの文中に“死人があつたときにも、その寝床を火の間にもつて行つて炙つて清めます。誰であろうが、人が死ぬと、そのもち物を火で清めるまでは、他の人の手にふれさせないのです”とあることでわかる。ドーソンは蒙古人の葬式について

墳墓の側において生前の愛馬を盛装せしめて犠牲に供し、かつ家財弓矢を墓前につらね、故人をして他界において使用するをえしめんとす。この儀式に与れるものは、二箇処に火をたきてその間を通過し、故人の小屋ならびにその一切の所有物をきよめ、しかして後、故人の記念として斎

(註9)
を行う。

とのべているが、こゝに儀式にあずかつたもの及び故人の小屋とその一切の所有物が火の間を通らされ、きよめられるのは、それらが死者と接触したためにけがれ、そのけがれをはらうためであると考えられる。即ちこゝでは人もきよめの対象となつてゐるが、それは死者と接触してけがれたためであり、前述の外国使臣が何ら火によるきよめをうけないのとは決して矛盾しない。

火は悪霊・邪気・毒などをはらう力があるばかりでなく、悪い行為もしくはそれによつて生ずべき害悪をのぞく力があると信ぜられていた。カルビニは蒙古人の考える悪い行為について、

馬に使う鞭にすぎること（彼らは拍車を使わないのだ）、鞭で矢にさわること、若い鳥を捕えたり、殺したりすること、手綱で馬を打つこと、骨の上で骨をたたきこわすこと、乳その他の飲み物ならびに食物を地上にこぼすこと、天幕の中で放尿をすることなどであるが、これが故意になされたときには、そのものは死に処せられ、故意でなかつたときには、占者に莫大な金額をはらつてこれらを清め、かつ天幕やこれらのものの全部を二つの火の間を通過させてもらわなければならない。
(註10)

とのべている。

火で悪霊・邪気・毒・いろいろのけがれなどをはらいきよめるときの光景については、カルビニが次のようにのべているので大體明かである。

彼らは二つの火をもやし、そばに二本の槍をさし、その槍の先に紐をはり、それに布片をぶら下げる。きよめられるものは人であれ、家畜・天幕であれ、皆この二つの火の間、布片をたれた紐の下を通らねばならぬ。その両側には女が一人ずつ立つていて、呪文をとなえながら水をまく。
(註11)
もしそのとき車がこわれたり、車から落ちたものがあれば、それは占者の所有となる。

火できよめるときの状況をえがいた記録はこれ以外には見あたらないが、カルビニの記録である以上、当時蒙古人のいたところではどこでも大體同様に行われたものと想像される。

この儀式をとり行うものについては、ルブルクは、彼が火の間を通過せずにすんだことをのべたところでは、“火のそばを通るとき、動物がたおれたり、品物がおちたりすると、それは係りのものの所有物となつてしまいます。”
(註12)
といつて、単に係りのものといつていただけであるが、前掲の彼がメツツ生れの女からきいた話の中では占者といい、カルビニは、前掲の引用文のなかに書かれているように、同じく占者といつてゐる。この占者なるものがシャマンであつたことは疑いなく、これらシャマンの当時における活躍よりは、すでに知られてゐるところである。即ちこのような儀式の主宰者が、すでに職業的なシャマンとなつてゐたことは注意すべきであらう。

なお奇妙なことは、以上のような火を神聖視することや、火にきよめる力ありとする習慣が、全然中国側の文献に見あたらないことである。中国人が注意しなかつたのか、それともそのような経験をしなかつたのか、いずれかであらうが、経験しなかつたとは考えられないから、恐らく経験しながら注意せず、記録にもとゞめなかつたのではあるまいか。さすれば匈奴その他、中国の北方辺境にあつた遊牧民族においても、以上のべたような習俗がなかつたとはいひきれないであらう。否むしろ、あつたと考えた方が妥当なのではあるまいか。

2. 現代蒙古人の火に対する觀念

古代蒙古人に見られる火を神聖視する觀念や、火に惡靈・邪氣・毒その他、惡行及びこれによつて生ずる害惡などをはらい、のぞき、なおす力があるとする考えが、その後いかに発展もしくは變化したか、これについての資料はほとんどないが、現代においてはどうか。ラマ・ガルサン・ゴンボエフはカルビニが伝えた古代蒙古の慣習および迷信を研究して、

(註13)

蒙古人が罪あることと考へた数々の行為は殆んど全部今日においても同様に考へられている。とのべている。

内蒙古ウランチャブ盟ハルハ右翼旗で私の見聞したところでは、火の中へ小刀などをつつこむとか、爐の火をまたぐことは禁ぜられており、たしかに火を神聖なものと考えてはいるが、惡靈・邪氣・毒その他をきよめるためや、けがれなどをきよめるために火を用いることは行われていない。さらに蒙古にあること30年、スウェン・ヘディンの数回の探検旅行や米国博物館自然科学部の中央アジア探検に参加したラルソン F. A. Larson は、“行儀のよい客は蒙古では火の上へ足をかざすというようなことはしない。そんなことをすれば、その家の竈〔爐〕を侮辱することになるのである。それはまた、わが西欧で他人の顔へ唾を吐きつけると同じなのである”とのべており、蒙古人一般の間に火が神聖視されていることがわかる。

(註14)

これ以外の蒙古人の火に関する慣習についての記録は非常に少い。このような少い記録のうち、最も重要なのはポターニンの調査である。彼はこの習慣について、

- 1, トルゴート人やハルハ人の迷信に従えば、次のことは罪業である。即ち……包丁を火の中につ
き入れること。……

(註15)

(註16)

- 2, キルギズ人〔西北蒙古にすむ〕はいう。火より偉大なものはない。

などをあげているが、さらに彼は“拜火の行事”を次のように紹介している。

蒙古人の語るところによれば、拜火という行事は年に一回、秋にこれを行う。その目的のために、天幕の主人はラマを招待し、そして羊の胸部の肉オブチュと、腸の脂肪質セメシとをとり、その束の中にノハイ・ウィピュス又はキラガナ (*Stipa capillata*) という草をつめて、これをくると渦巻型に捲き、この捲いたものを、天幕の中の火の上にたててある五徳(四脚)の上におくのである。火にかけた肉が炙られる間に、主人の妻は脂のはいつた杓子を火の上にかざしてもつている。するとラマが祈禱ガルイン＝スドル galyn-sudur, 文字通りにいえば火に関する本をよみあげる。その間に臨席している人々や、子供たちがみなでフーラ, フーラ khural-khural とさけびながら脂を火にかけるのである。この叫び声は、蒙古民衆の意見によれば、タングート語で、来い、来い、という意味である。火を崇拜するもう一つの儀式はタルィグ・アプチ即ちタルィグを取る、というのである。これも同じく秋にもよおされる。主婦は羊の前足ハ、シャン・チュムク kha,šan čumuk と胃、ゲディス gedis 及び尾、セール sël を皿にもる。すべてこれはラマの祈によつて清められ、ブルハンの前の祭壇に三日間あげておかれる。が、殺し

た羊の残りの肉はたべてしまうのである。祈りをとなえている間に臨席者は手に手に種々のチーズ、即ちビスルィフ、アリグ及びフルートをもつて支えている。ラマの祈りが終つたとき、臨席者はみな、空気中でチーズをふりながら、フーラ、フーラ、又はフーレイ、フーレイ、khurei! khurei! と叫ぶのである。^(註17)

ポターニンの紹介した以上二つの拝火の行事にはラマ僧が主役を演じているが、蒙古民族の間へのラマ教伝播以前には、恐らくシャマンが主役を演じたものと考えられる。さらにポターニンはこのような習慣の存在を西北蒙古において知つたのであり、これが蒙古一般において行われたと考えることはできない。

以上のように西北蒙古においては火を神聖視し、また神聖視して拝する行事がおこなわれているが、この地方に残存するシャマンたちも、まじないをするにあつて火を盛んにもやした。たとえばポターニンの記すところによれば、コブドのシャマンは、まじないをはじめる前に“燎火の中に杜松の実をふりまいて、^(註18) 仏像のまつつてある祈禱所の夜燈をたいた。”^(註19) 彼がジンジリクで見たナイドゥィクというタンヌ・ウリヤンハイの女シャマンは、まじないをする前から終るまで、間断なく助手たる母親に、爐の火の中へ杜松の実をなげいれさせ、さらに帳幕の前におかれた、神にささげられた馬の鼻の前でも、三脚台の上で杜松の実がも^(註19) されていた。ナイドゥィクのまじないの場合にははつきりしないが、コブドのシャマンの場合の燎火は、猊焚をもやしてしたものではないらしい。このようなシャマンのまじないにおいて火を用いていたことは非常に古くからあつたことで、それがいまだに残存しているもの、又一方から見れば、シャマンは自己のまじないを権威づけるために、一般人が神聖視した火をもやしたと考えるべきである。

これらポターニンの伝えたところによつて、西北蒙古人が火を神聖視したこと、又シャマンがこの神聖視した火を利用したことが明かとなるが、これと同じ行事、シャマンのまじないは見られないにせよ、少くとも火を神聖視することは、蒙古高原全体にひろまつていると見るべきではなからうか。さらに現在蒙古各地にはラマ教が普及し、シャマンの姿は次第に見られなくなつているとはいえ、ラマ教の伝播以前に蒙古各地に見られたシャマンはいずれも火を用いたことは疑いない。例えば前掲の拝火の行事のごときも、現在はラマの手によつて行われているが、過去においては必ずやシャマンの手によつて行われていたにちがいないのである。

現代の蒙古民族の間に火を神聖視する観念のあることは確実であるが、火に悪霊・邪気・害毒・悪い行為などをきよめる力があるとする観念の存在は、奇妙なことに文献にあらわれない。しいてあげれば、ポターニンの伝える次の記事位のものである。

ハルハ人が家畜を売りさばくときには、次のような習慣がまもられる。即ち、主人は売却された羊なり、牛なり、馬なりから毛を一かたまりむしりとつて、売らるべき家畜の唇の下へそつと押しこんで、それを唾液でぬらし、その後でこの毛のかたまりを火中に投するのである。このことは蒙古語でキンク、即ち幸福と名づけられ、家畜の幸福を取る、マルィン・キンク・オムナ^(註20) malyn kišik omna といわれている。

幸福を取るという言葉は、売られ行く家畜が家の幸福をもち去るおそれがあるため、その幸福をもちさられないように、との意味のようにも解されるが、蒙古人のこの解釈は恐らく誤りで、売られて行く家畜の幸福をいのつたものではなからうか。古代蒙古では悪霊・邪気・毒などをはらう力を火がもつと信ぜられた事実があることから見て、売られ行く家畜の肉体の一部を火に投ずることによつて（肉体の一部をさらに唾液につけたのは、念をいれるためであろう）、この家畜から悪霊・邪気などをはらい、幸福を祈つたのではあるまいか。日本では今でも家を出て行く人の安全をいのつて切り火をする習慣がかなり広くのことっているが、これと同じ意味のものではあるまいか。この考えが正しいならば、この習慣は火に悪霊・邪気・毒などをはらう力があるとする考えの名ごりであり、しかも悪霊・邪気・毒などをはらう力があるという考えから、幸福にする力があるとの考えに発展したことを示しているものである。しかし悪霊・邪気・毒などをはらう力が火にあるとする観念の存在をしめす記録のないのは残念であるが、これはおそらくラマ教の普及によつて消失してしまつたのであろう。アルタン・ハン時代に内蒙古に伝えられたラマ教は、迅速に全蒙古にひろまつたが、その当然の結果としてシャマニズムは影がうすくなり、従来シャマンによつてとり行われていたいろいろの行事は、代つてラマがとり行うようになり、ラマ教的な観念から不合理と見られた慣習・行事は姿を消さざるをえなかつたはずである。ポターニンの記録した拜火の行事をとり行うのにラマがあたつてゐるのは、ラマがシャマンに代つた例であると考えられるが、カルビニヤルブルクなどの記録した、火に悪霊・邪気・毒などをはらう力のあることを示す儀式または儀式類似のことは、いずれもラマによる祈禱にとつて代られ、そして消滅してしまつたのではあるまいか。ポターニンが記録した家畜の幸福を祈るために火中に家畜の肉体の一部を投ずることなどは、わずかに滅亡をまぬがれた慣習の一つではなからうかと考えられる。

火に悪霊・邪気・毒などをはらう力があるとする観念がラマ教の普及によつて大部分滅ぼされたにかかわらず、それよりももつと原始的な、火を神聖視する観念のみがいまだにつゞいてゐるのは、それがラマ教の信仰とさして矛盾しなかつたからであることは勿論であるが、更に別な原因も考えられる。それは燃料によるものである。

蒙古民族が燃料としてもちいるのはアルガリ argali 又はアルガル argal と称せられる家畜の乾燥した糞のほか、薪である。獣糞すなわち家畜の糞は馬牛などの大家畜の糞を最上とする。蒙古人は大きな籠を背負つて草原でこれを採集して用いるが、空気が乾燥しているので、臭気は殆んどない。採集したものは屋外に小山のように積みあげておく地方もあり（例えば満州蒙古の一部）、煉瓦型にかためてつんでおく地方もあり（ハルハ右翼旗所見）、さらに仔畜をいれる囲いとして、土塀のようにつんだところ（同）もある。これを時に応じて使用するが、家畜は濃厚飼料を一切あたえられず、草原に自生する草のみをたべているので、アルガリはあまり煙をださずにもえる。薪とすべき樹木の少い草原における最良の燃料といひうるが、もともと草なので、火持ちがわるく、すぐたつてしまふ。これを火にくべるときは始終補給しなければならない。

薪として用いられる樹木は、蒙古高原が乾燥草原地帯であるため、非常にすくない。北部はシベリアの森林地帯につらなつて、森林が見られるが、一般には水流のある溪谷に少し見られるにすぎない。

い。森林で薪を採集するほか、牧草もはえぬような不毛地帯に好んではえるオルトス（日本の高山地帯に生ずるハイマツに似た矮樹）をもちいることもある。オルトスを燃料として使用するのはハルハ右翼旗でも見られたが、森林からきりだした薪を使用する例はクーロン（今のウラン・バートル）所在の官庁および貴族の邸宅でみられる。即ちボズド＝エエフはその旅行記中において、張家口にむかうべく、クーロンを出発したその日の条に、

こゝをすぎてトラ河を去る 2 霹里乃至 3 霹里のところ、バガ・モドチンと名づけらるる一部落散在す。これクーロンにある公祖の邸に薪を供給する任務のものの住地なり。彼らはこの薪をトラ河の上流の諸山よりきりだす。^(註21)

とあり、ついでクーロンよりウルグン哨所へ向う途中、出発第一日の条に、

6 時 30 分 イエ・モドチンの第一アイルに到着す。イエ・モドチンは公役としてクーロンの官公庁建物の燃料たる薪材の供給を行う蒙古人の大部落のことなり。^(註22)

とある。J. E. Kowalewski の蒙露仏辞典によれば、modotchi には指物師、大工の意をふしてあるが、modon（樹木、材木）を司るものの意と考えれば、modotchi には薪を司るもの、薪の係り、薪の供出者の意味もでてくるはずで、ボズド＝エエフのいうモドチンは薪の供出者の意と考えてさしつかえない。バガは小の意、イエは蒙古語 ikhe; ekhe の訛つたものと見るべく、大の意である。即ち一つは薪供出者の大部落、一つはその同じ小部落となる。従つてクーロン所在の官庁、官邸及び貴族の邸宅用にあてるための薪の供出を、公役としてこの二部落が負担していたわけで、これらの場所では薪が燃料として使われていたことが知られる。

以上数種の燃料のうち、薪は北部で用いられるだけで、一般的ではなく、オルトスも局部的に利用しうるのみで、一般蒙古人の燃料は大部分猋糞にたよっている。ボズド＝エエフはクーロン在住の蒙古人について、

燃料としては蒙古人はカラ松、時としては樺の薪を用う。されど彼らの殊に消費する燃料は猋糞にして、冬季各帳幕ごとに 70 乃至 80 車の猋糞を消費す。^(註23)

とのべている。クーロンでさえこのように猋糞が燃料として重要な地位をしめている以上、他の一般蒙古人が猋糞をもちいていると考えるのは不当ではなからう。ハルハ右翼旗においても、オルトスよりも猋糞の方が蒙古人に支配的に用いられているのである。

古代蒙古においても、蒙古人が使用した燃料は、現在と同じであつたと見てさしつかえないようである。大体彼らの現在の燃料を大別すると薪と猋糞とになるが、古代でも恐らく同様に、悪霊・邪氣・毒などをはらう目的には、大きな焰を必要としたらうから、おそらく薪が用いられ、炊事には主として猋糞が用いられたものと推察される。古代蒙古人が炊事に猋糞を用いたことは、宋の鄭思尚の“心史”雑文の条の大義略叙の中で、蒙古の風俗をのべて、

地寒少草木。爭収馬糞。曝乾充爨。

とあることでも知られる。火の使用目的から見れば、炊事の火こそ最も原始的であり、かつ重要なものと考えられるから、蒙古人の用いる燃料は第一に猋糞、第二に薪と見て少しもさしつかえなく、そ

してそれは古代から今にいたるまでそうであつたのである。

このように蒙古人が燃料として好んでもちいている獣糞は火もちが悪いため、薪その他の燃料よりもえつづけさせるのに厄介である。従つてその保存をはかるために精神的には余計に神聖視する結果をひきおこす。一度きえれば、これをおこすのは容易でない。他の家に火種をもらいに行くにしても、隣家は非常に遠い。彼らは薪その他、より持続性ある燃料を使用するものよりも、余計に火をたやさぬようにつとめ、神聖視せざるをえぬ立場にあつたのである。ラマ教が普及し、火に偉大な力があるとの考えから出た数々の行事、習慣がなくなつた後も、マフチの普及するまでは、火の神聖視ということだけが決してほろびはかつたのは、以上のような性質の燃料が用いられていたからであろうと考えられる。

3. 火と爐との家に對する關係及びその意義

原始時代において人類は火を神聖視し、これに惡靈・邪氣・毒などをはらう力があると考えたが、その一方、火によつて食生活を豊富ならしめ、炊事には必ず火がともなうようになり、かつ火は家の中心的存在となつて行つた。炊事に火をもちいるときには必ず爐又は竈において用いられ、火と爐もしくは竈とは不可分のものとなる。この両者は各家庭に必ず存在し、家庭生活の中心となり、やがてそれらに対する崇拜がおこなわれるようになり、神格化されて行く。その場合、火の神もしくは爐(又は竈)の神となるが、火と爐(又は竈)の神というように別々になるとはいへ、その一方が他を没却したのではなく、この場合の火の神は、必ず爐(又は竈)の存在を、また爐(又は竈)の神は必ず火の存在を前提としている。この両者のうち、爐(又は竈)の神の方がはるかに一般的で、中国においても日本においても、現在にいたるまで信仰されていることは周知のことである。

このような習俗は遊牧蒙古人の間でも存在している。蒙古人が炊事用の火をたくところは爐であつて、竈ではない。この爐は帳幕の中央にあり、方形に地面が露出している部分である。周囲には茶碗類をおくための低い台がおかれ、中央に鉄製の四足の五徳様のものがおかれる。この五徳は高さ約1尺、上下の中間位のところに火床があり、獣糞がそこでもやされ、上に鍋をかけて炊事をする。ハルハ右翼旗方面では大体この形式が多く見られたが、内外蒙古を通じてこのようであるらしい。前にも引用したチンギス・ハンの大ヤサの一条のうちに、“炊事の火及び食物をもる皿の上をまたぐことを禁じたり”とあるのは、当時すでに蒙古人の間に爐およびそこにもやされている火が崇拜されていたことを示すものである。

炊事用の火及び爐(又は竈)は家の中心という意味から、すゝんで家そのものをあらわすに至るが、これも蒙古人の間にみられる。たゞし、火は家庭以外の場所にもありうるが、爐(又は竈)は必ず家の中にあるので、これのみで家をあらわす場合が一般に多いが、蒙古人の間ではかならずしもそうではなかつたようである。チンギス・ハン時代に家督相続者たる末子を爐の王とよんだのは、爐をもつて家をあらわした例である。降つて明代の内蒙古の風俗を記した蕭大亨の北虜風俗(夷俗記)匹配の条によると、結婚に際し、婿が嫁をひきつれて自分の家へかえつてくると、嫁は長い紅衣をつ

け、高帽をいただき、帳幕の中にはいつて、

婦、羊尾の油三片を持ち、竈に對し三たび叩頭し、即ち油を以て竈に入れ、之を焚く。竈を祭ると異なるなし。

とのべている。羊尾の油を投じた竈とは爐をさしているのであろう。蒙古羊は脂肪尾種で、尾は長くないが広く、円形をなし、体の後方をおい、その先端は急にほそくなっているが、この尾に多量の脂肪を沈澱し、冬季の牧草欠乏にたえられるようになっていいる。この羊の尾の脂肪は、蒙古人が羊肉のうち最上のものとして珍重するところであるが、このような脂肪のかたまりを三片も火の中に投ずれば、もちろん火は勢いよく燃えあがる。はじめて婿の家に来た嫁が、その家の爐に三たび叩頭し、さらに爐の火に脂肪を投じて勢いよくする儀式的意味するところは、爐すなわち家を嫁が盛んにすることである。

別の機会にのべたいと思うが、現在の蒙古人においても、家庭内での婦人の地位はきわめて低く、嫁をもらうということは勞働力をますことと同じ意味をもっている。従つて嫁は当然婿家の一種の財産であり、嫁とりは婿の家の財産の増加を意味する。また将来子女をあげて、婿の家の勞働力を増加させるべき運命もしくは義務をになつたものであり、嫁はそれを自覚すべきである。三度叩頭して婿の家の爐に敬意を表し、爐の火の中に脂肪を投入するのはこのような意味を表徴するものと考えてよからう。

北虜風俗に見える結婚の際のこの儀式は、現在ハルハ右翼旗においては大分変化しており、火中に脂肪を投ずることは行われていない。昭和18年10月、この地で我々が家族制度実態調査を行つた際、第四佐（旧タイチ・アイマーク）のナチル・ドルチン（当時旗公署の書記）の供述したところによると、彼自身の結婚式るとき、婿につれられてきた嫁は、婿の家にはいると、両親と親戚とに拝礼をし、家の火即ち爐の火に拝礼をし、ついで酒宴にはいつたという。又第四佐（旧ゴル・スム）のボドジャブ（当時このホシュンのジンキン・メイレンであつた）は自身の経験を語つて、婿の家へ到著した嫁は爐及び仏壇に拝礼をし、ついで夫の両親、両親の友人、夫の兄弟と知人に拝礼し、これで式をおわつたとのべている。また第二佐（旧ヒラ・アイマーク）のチョド布林（当時第二佐の佐領）は、婿の家へはいつてきた嫁は、式がはじまると、まずボロハンに拝礼をし、爐の火に向つて酒と羊肉の肉をそなえ、ついで婿の父母に自分の名をなのつてあいさつし、続いて婿の兄弟姉妹にあいさつして式が終る、と自分の経験したところを語つた。こゝにいうボロハンへの拝礼とは仏壇に拝礼することである。思うにハルハ右翼旗では、結婚の際の儀式では、礼拝の重点は爐から仏壇に移つており、爐の火に脂肪を投入することは行われていない。恐らくラマ教の普及によつて、このように仏壇が重視されるようになったものである。しかし爐の礼拝又は爐に酒および羊肉を供することに往時の遺風がのこつていいることは確實である。

北虜風俗にしるされたような儀式、また現在ハルハ右翼旗における結婚式の状況などから見て、爐が家を象徴していることは確實であるが、火と爐との兩者をもつて家をあらわすこともあつたようである。現在ハルハ右翼旗の貴族の間では、^(註24) “ガル ゴルンク サヒホ イヘ ホブグン” 即ち “火と爐とを守る大きい子供” という諺がおこなわれている。大きい子供とは長子をさし、貴族階級の間に

における長子相続の原則をしめした言葉であるが、こゝでは火と爐との両者によつて家をあらわさせている。

爐だけで、もしくは火と爐との両者によつて家をあらわしたほかに、火だけで家、さらにすゝんで一族もしくは部族をあらわしたことも、中世にはあつた。アルタン・トブチには、さきにマンドッゴル・ハンの第二妃であつたマンドッハイ・サイン・ハトゥン（又はマンドッハイ・チェチェン）が、幼いダヤン・ハンをもちたてようと、征戦中に、チンギス・ハンの弟カフサル^{カフサル}の後裔たるコルチン部のノヤン・ボラト王（蒙古源流にはウネ・ボラト王と見える）が彼女に結婚を申しこんだが、そのときの彼の言葉は、小林高四郎氏の同書の訳“蒙古黄金史”によると、

あなたの竈を守り、あなたの遊牧地を差配しましょう。
(註25)

であつたという。しかしこの訳文は小林氏の註によると、“原文は、汝の火を撃ち、汝の遊牧地を支配してやろう、とあるが、ウラヂミルツォフ教授によつて本文のように訂正した”という。小林氏によつたウラヂミルツォフの蒙古社会制度史には、

ウネ・ボラト王 Üne-Bolod-ong は寓意的にこう言つている。gal-i cinu sakiju ögsü, nutug-i cinu jigaju ögsü, “あなたの竈を守り、あなたの遊牧地を差配しましょう。”
(註26)

とあり、これに註して、アルタン・トブチ91頁によつたこと、ゴンボエフ版では原文が間違つており、北京版でも同じことであるが、両者の誤謬の部分は一致していないことをのべている。原文のどこがちがつているのか知らないが、蒙古語 gal を竈と訳すのは、結局それが家を現わすことにおいては同じだとはいへ、誤りで、gal は決して竈ではなく、火である。カラチン本蒙古源流はその一部にアルタン・トブチを含んでいるが、藤岡勝二博士のその対訳本のこれと同じ箇所をみると、ローマ字転写では

gal i cinu cohiju, nutuk i cinu jigaju ügsü,
(註27)

であり、邦訳は“汝の火をうちて、汝の諸^{トツグ}凶克を指せ”である。藤岡博士の如く、gal はそのまま火と訳すべきで、ウラヂミルツォフの如く、ことさらに竈と訳す必要はあるまい。

このノヤン・ボラト王の言葉は求婚の言葉で、マンドッハイ・サイン・ハトゥンが当時もつていた家と牧地とを自己のものとしようということによつて結婚することを示したものであり、当時家を火であらわす言い方、したがつてそういう考え方のあつたことを示している。

アルタン・トブチにはタイツォン・ハン（岱総汗）即ち明側の史料に見える脱々不花王をその弟アガバルジとオイラート部人とが共謀して殺したのち、オイラート部人はさらにこのアガバルジ・ジノンを殺そうと、他の諸侯と相談したとき、ジノンを非難して、

自分の部族のことを思わなかつたものが、

我が部族〔オイラート〕のことを考えるだろうか、

自分の国を思わなかつたものが、

われわれの国のことを考えるだろうか、

自分の名を思わなかつたものが、

われらの名を考えるだろうか。

自分の火に水を入れたのだ。われらの火に脂を入れたのだ。

(註28)
これは誰にいいジノンだろうか。

といったという。“われらの火に脂を入れたのだ”とはアガバルジ・ジノンが兄タイツォン・ハンを殺し、北元すなわち明側でいう韃靼部の勢力を衰えさせ、もつてその敵手たるオイラート部を興隆させたことを意味する。したがって“われらの火”の火はオイラート部をさすものである。又“自分の火に水を入れたのだ”とは、アガバルジ・ジノンが北元の勢力を衰えさせたことを意味し、この火は北元すなわち韃靼部を意味する。従つてこのオイラート人の言葉にみえる火とは部・部族・ウルス(邦)をあらわしている。

以上二つの例に見られるように、火は家のみならず、ひろく部・部族・ウルスをもあらわしたことがあるのが知られるが、これらの火は爐の中心でもえている火、即ち炊事に用いられる火をさしたことは明かで、爐と不可分の関係にあるものである。

爐およびそこにもやされる火が家を表徴することを最も明確に示すのは、分家の際に火を分ける習俗の存在することである。昭和18年秋及び19年秋の二回にわたつて、ハルハ右翼旗で我々はこのホシュンの遊牧蒙古人の間に次のような習慣のあることを知りえた。貴族たると平民たるとを問わず、このホシュンの蒙古人は、そのすでに結婚した息子を分家させるにあたつては、新しい帳幕と家財道具、家畜などを分与するが、分家の当日には、さして儀式ばつたやりかたではないが、本家から分家へ爐の火を分ける。一定の資格をそなえたものが、本家の帳幕の中央の爐の五徳の中にもえている火をとり、新しい鉄製の五徳に入れて分家へ持参し、その帳幕の爐の中央におくのである。燃料は獣糞で消えやすいから、分家が遠い場合には途中で補給しなければならない。火の持参者の資格は、分家の家長の合い性のものと定められている。合い性とは十二支の組合せで、次のようなものである。

分家の家長の生れ年		火の持参者の生れ年
子	歳	辰歳及び申歳
丑	歳	巳歳及び酉歳
寅	歳	午歳及び戌歳
卯	歳	未歳及び亥歳
(以下循環)		(以下循環)

この合い性は結婚の際、養子縁組の際などでも同じである。分家の場合には、合い性さえよければ、年齢にも性別にも関係なく、子供でも大人でも老人でもかまわず、他の佐のものでもかまわない。たゞし両親の家族や分家の家族はたとえ合い性がよくても、資格はない。そして持参者は単独でもつて行くことになっている。

我々が、分家の際に爐の火を分ける習慣の存在を確認したのは、このハルハ右翼旗だけで、他の地域でどうであるかを調査できなかつたのは遺憾であるが、このような習慣が他の民族の間にも往時ひろく存在していたことは周知のことであり、詳細に調査すれば、おそらく他の地域の蒙古人の間にも、その存在が認められるのではなからうか。他方このような習慣の起源が非常に古いことを考えれ

ば、中世、古代を通じて蒙古人の間にひろく行われていたと考えるのは不当ではあるまい。中世や古代の蒙古人の生活に関する諸文献のうちには、このような習慣の存在を直接証拠だてる記録は見つからないが、存在したものと考えられる。チンギス・ハン時代に家督相続者たる末子を *odcigin*, *odjigin* 即ち“爐の王”又は *ejen* 即ち“家の主”と称したことは、間接ながらそのような習慣の存在をにおわせている。

では分家の際にこのように爐の火を分けるというのはどのような意味をあらわすものであろうか。現在ハルハ右翼旗においては、貴族階級は長子相続制をとり、平民階級においては末子相続制をとっている。そのいずれの場合においても分家して行く息子が本家から分与される財産の種類は一定している。その主要なものは帳幕及びその中に含まれる家財道具、家畜などである。貴族の場合には奴隸の分与されることもあるが、現在はあまり見られない。このとき与えられる帳幕や家財道具は原則として新調のもので、新調のものを与える経済的余裕のないとき、両親の家にそれらのものの余分があつたときなどには、使い古しのものの与えられることもある。なお分家の爐を形成する五徳はこの家財道具のうちに含まれ、これも新調を原則とする。家督を相続する長子または末子の相続する財産は、前家長の用いていた帳幕およびその中に収容されている家財道具、家畜類であり、前家長の用いていた爐もまた彼のものとなる。前家長に、新家長の実母以外に数人の夫人があれば、それも新家長が相続する（婦人は家庭内で大きな労働力をもち、かつ一種の財産とみなされている）。貴族の間では奴隸も相続される。以上はハルハ右翼旗の現在の状態であるが、これは他の蒙古人についてもいえることであるのみならず、古くチンギス・ハン時代においても大体同様であつたらしい。たゞ現在家督相続者は父の仏壇を相続するが、これはラマ教の普及以後にあらわれてきた現象である。

分家の際、独立する息子が本家から分けられるのは、父の爐ではなく、その上にもられている火の一部のみである。父の爐は家督相続者に伝えられる。家督相続者が父からうけつぐ爐の上にも、やはり火がある。火を分けてもらう分家の設立者のもらう財産は、帳幕およびその内部の家財道具と家畜とであるから、火はこれらのものをさすと考えてよい。爐とその火をうけつぐ家督相続者は、以上のほかに実母以外の父の夫人、仏壇だけをうけつぎ、爐の意味するものは現実的にはこれだけで、さして重い意味はないようでもある。しかし前にも述べたように、爐とはその家を表徴する。表徴的な意味における家に附属し、或いは家を構成し、また家と不可分な関係にあるものを意味するとしなければならない。換言すれば、爐とは、前家長時代の“家”という観念をつくりあげていたものをさし、火とはその観念に附随するもの、それより分離しうるものとすべきである。これを具体的な例についていえば、爐の意味するものは父(前家長)の使つていたものすべて(爐・帳幕・家財道具・妻たち・仏壇)であり、しかも“家”の最少限の構成分子であり、そしてそれを除けば“家”の観念が成立しなくなるものである。従つてそこには家畜ははいらないし、もし現在使用してない帳幕や家財道具などがあれば、それらも爐の観念の中に含まれない。火の意味するものは家畜とか、使用してない帳幕・道具類をさすほかに、新しい分家を創立するのにそなえて買いこまれた帳幕・道具類もふくまれることになる。分家の創立者は父の使つているものは、これを父から分与されることはない。それは爐に属するからである。彼が父から分与されるのは、火の意味するもの、即ち父の使用してないもの、

又は彼に分与するために、多くは家畜と交換してえた、もしくは家畜を売った金で買いこんだものと及び家畜類である。家督相続者は前家長たる父の使用していたもの、すなわち父の“家”を構成していたものすべてをうけつぎ、更に家畜類をも得る。爐と火とをうけつぐからである。表面的に見れば、家督相続者のうけついだ財産は、分家したものにあたえられた財産と、その種類において大して差はないようであるが、実は非常な相違がある。爐と火の両方をうけつぐものと、火だけをもらうものとは表面的には同じような財産をもらうが、精神的内容はちがう。火だけをもらつた分家創立者は、父の家を構成しているもの、すなわち爐の意味するものは何も分与されえない。そして家督相続者が分家創立者のように新しい帳幕、新しい家財道具などを父からもらわないのは、その必要がない、というよりは、もつと誇るべき、父の使用したものがあからである。むしろ家督相続者のうけとる家畜類にこそ、火の原初的な意義があつたのではあるまいか。分家創立者のうけとる火が家畜のほか帳幕・家財道具をも含んでいるが、この家畜以外のものは、火の意義のひろくなつたものというべきではなからうか。これらは家畜と交換によつてえられるからである。

さきに明の蕭大亨の北虜風俗のうちに、結婚に際し、嫁が婿の家に到着するや、まず羊の尾の油三片を爐の火の中に投じて、火勢を強める儀式のみえること、それは爐すなわち家を盛んにする意味であること、また嫁を入れることはその家の財産の増加を意味することなどをのべたが、以上のように爐とその火との意義を考えてくれば、嫁とはこの場合、火の勢を強めるものであり、火中に投じられた脂肪こそは嫁を意味するといわなければならない。

4. 古代蒙古の“爐の王”

チンギス・ハン時代の蒙古においては広く末子相続がおこなわれ、息子は成長し、結婚すると、家畜及び帳幕をあたえられて、順次父のもとから独立し、最後にのこつた末子のみは結婚後も父のもとにとどまり、父の死後、家督を相続した。この末子は当時 *odeigin; odjigin* 即ち“爐の王”又は *ejen* 即ち“家の主”と称された。末子をなぜ爐の王、家の主とよんだかについては、ウラヂミルツォフは次のように説明している。

末子は父の基本財産をえた。父のユルト〔帳幕〕、もしあればその妻とその屯營、遊牧アイルをあわせて相続したのである。従つて末子は *ejen* 即ち“家の主”として尊敬をうけた。末子は家爐の守護者であるので“爐の王” *odeigin; odjigin* とよばれた。ラシッド・ア・ジンはこの制度について明確に次のようにのべている。“蒙古の風習は次のようなものである。末の男子はエジェンとよばれる。その理由は、彼が家にいて財産・世帯・家計を処理せねばならぬからである。”エジェンになるのは末子で、これが家庭と天幕にとどまる。即ち“爐とユルト”の主となるのである。^(註29)

この断定にはいささか疑問がもたれる。虚心にながめると、“家の主”とは家長をさす言葉であり、末子がいかに“家にいて財産・世帯・家計を処理”するからといつて、かりにも家長の意味をもつ家の主なる名称を最初から与えられる理由はない。又“末子は家爐の守護者であるので爐の王とよばれた”とあるが、現実的な爐の傍でもつとも多くの時間をついやすのは主婦のはずであり、もしこの爐

を家を意味するものと解すれば、爐の王は末子でも主婦でもなく、家長たる父でなければならず、爐の王の名を最初から末子に与えるのは奇妙である。

この家の主乃至は爐の王なる語がいつ頃生まれたかはわからないが、まず家の主とは、最初はその言葉のしめすように家長に与えられたものであろう。もしそれが父権制時代に発生したものならば、父に与えられたであろうし、母権制時代に生れたものならば母に与えられ、ついで父権制時代に入つて父のものになつたであろう。爐の王なる語はこの語が、爐が家をあらわすようになる以前に生れた場合及び爐が家をあらわすようになった後に現実的な爐を守るものの意味をもつものとして生れた場合とには、主婦に与えられたものと考えられる。そして前者の場合には、爐が家を意味するようになると、家長たる父に与えられるようになり、後者の場合も間もなく、この名称は家長たる父をさすものとなつたにちがいない。即ちいずれの場合にしろ、爐の王なる語は主婦たる母から家長たる父をさす語に転じたものと考えられる。さらに、爐が家を意味するようになった後に、この意味における爐の王という語が生れたとすれば、それは男女を問はず、とにかく家長をさしていたと考えざるをえないが、たとえ最初それが母権制時代に現われ、母にあたえられたとしても、父権制時代の到来とともに、それは父の手に移つたものと考えられる。要するにこれらの語は生れたときには母をさすものであつたか、父をさすものであつたかは不明であるが、とにかく父家長をさす名称だつた時期のあつたことは確実である。

ウラヂミルツォフの研究によると、12世紀頃の蒙古民族は森林にすむ狩猟民と、ステップにすむ遊牧民とにわかれていたが、半猟半牧の民もあり、狩猟民が遊牧民に変化する傾向があつて、遊牧民といつても、その経済面では狩猟が相当重要性をもつていたといふ^(註30)。換言すれば当時の蒙古民族は若い遊牧民だつたのである。このような生活であれば、男子の生活は主として屋外でおくられたはずである。すでに爐の王なる語の爐とは家の意味に転化しているとはいえ、蒙古人は家庭にあつてはいつも目の前に爐を見ている。そのため表徴的な意味のものと現実的な意味のものとに混乱が生じ、爐の王なる語は父からはなれて行つたものと想像される。そしてこの名は、男性で、しかも爐にもつとも関係のふかいものに移つて行つたにちがいない。この資格をみたすものは末子であつた。末子是一般に最もあまやかされ、家にいる期間がもつとも長く、当然家長の妻たる母と共に爐の周辺にいる期間がもつとも長い。しかも当時は末子相続制がとられ、彼こそは将来の父の財産の相続者、家督相続者、そして将来の“爐の王”である。このようにして爐の王なる語は不在がちな現在の家長たる父の手から、次代の家長予定者たる末子の手にうつつたのであろう。もちろん末子に与えられた爐の王なる名称は、最初は“爐の王たるべき予定者”の意味をふくんでいたのであろうが、いつしか、“予定者”の意味は失われ、形式化し、単なる称号としての“爐の王”の語がのこつたものと見るべきであらう。

では“家の主”なる語はどうして末子にあたえられたか。恐らく父権制時代にはいつてのち、家長たる父をさす語となつていたこの語は、同じ意味を有するものとなつていた“爐の王”なる語と起源を異にするに拘わらず、まったく同様にあつかわれるようになり、その結果、爐の王なる語が末子の名称に転化すると同時に、これ又末子のものに転じたと考えられる。ラシッドが、末子が“家の主”

とよばれる理由は、彼が家にいて、財産・世帯・家計を処理せねばならないからである、とのべているのは、その当時の状態をもとにしての説明的解釈であつて、正しい解釈ではないようである。又ウラヂミルツォフが、末子は家爐の守護者であるので“爐の王”とよばれた、とのべているのも、ラシッドのそれと同様、あまりにも説明的解釈にすぎるようである。

この *odeigin; odjigin* 即ち爐の王、及び *ejen* 即ち家の主という言葉は、普通名詞としては元代以後文献に見えなくなる。*odeigin; odjigin* はチンギス・ハン時代には人名の前後につけて固有名詞のようにつかわれ、さらに真の人名を畧し、その人を単に *odeigin; odjigin* とよぶことさえあつた。たとえばチンギス・ハンの末弟テムゲがそれで、彼はテムゲ・オッチギンとよばれ、さらに単にオッチギンとよばれた。しかしこの用法も明代にはすでに姿を消している。*ejen* も大体 *odeigin; odjigin* と同様の経過をたどり、普通名詞としては元代以後文献にあらわれなくなる。もつとも明代以後、末子相続制が文献の上にまつたくあらわれないにかゝらず、現在においてもハルハ右翼旗の平民階級の間におこなわれている事実から見て、末子を意味する *odeigin; odjigin; ejen* なる語が実際には一部の蒙古人の間に存在していたのかも知れないが、とにかく文献の上には全くでてこない。そして現在ハルハ右翼旗の平民の間には末子相続制が存在しているにかゝらず、末子をさすものとしての *odeigin; odjigin* あるいは *ejen* なる語は存在していない。

では何故末子をさす *odeigin; odjigin* もしくは *ejen* なる語が消失したのであろうか。貴族階級についていえば、ウラヂミルツォフによると、“古代のように父の本領を末子へ与える習慣は元朝時代にはなくなつていた。ともかく今観察しつつある時代〔14-17世紀〕には全くこれが見られない、”^(註31)とある。即ち末子相続制は元代にすでに滅んだといつている。この説は大体妥当な見解であろうが、この末子相続制の終焉とともに、末子を意味する *odeigin; odjigin; ejen* なる語は意義を消失して、滅んだものであろう。では平民階級においてはどうか。この問題はまだ私には解決できない。それにはもつとひろく現在の蒙古民族の家族制度を調査する必要があるからである。

5. む す び

以上のべたところを要略すると、次のようになる。

蒙古民族の間においては、他の民族と同様、まず火を神聖視したが、さらにこの習俗は発展して、火に悪霊・邪氣・毒などをはらう力があるとする考えがおこり、転じて幸福を願う意味にもちいられた。チンギス・ハン時代は丁度この時期のなかにはいる。しかしラマ教の普及によつて、これらの習俗は滅んだが、火を神聖視する考えだけは現在までのこつている。これには蒙古人のもちいる燃料が、火持のわるい獣糞であつたことが大きく作用している。

一方、火は炊事に用いられたため、当然家の中心的存在となり、それは爐において燃やされたため、爐と結合して、もしくは火・爐それぞれ単独に、家をあらわすようになり、火はたゞに家のみならず、一族・部族をも意味したことがあつた。現在ハルハ右翼旗には、分家の際、火を分ける習俗があるが、このような習俗はチンギス・ハン時代にもあつたと思われる。この場合の爐は表徴的な意味

における家から分離しえぬもの、即ち‘家長たる父の使つていた’爐および帳幕、その帳幕内にある家財道具、家長の夫人たち、家長たる父の使つていた仏壇(たゞシラマ教の普及以前には、これは存在しない)などを意味し、火は、家畜類を主とし、これによつて交換入手しうる新しい帳幕や家財道具を意味した。

チンギス・ハン時代には、爐の王なる語が末子をさすものとして用いられている。最初この語は主婦又は家長を意味したが、ついで家父長のみをあらわすようになった。しかし爐の王なる語が行われたのは、蒙古民族が若い遊牧民であつた時代で、狩猟が家庭経済維持のために絶対必要だつたので、家父長は家を留守にすることが多く、爐の王なる語は家督相続予定者にあたえられるようになった。当時は末子相続制がとられていたので、この語は当然末子のものとなつたのである。末子を爐の王とよんだ例はチンギス・ハン時代に多いが、間もなく蒙古貴族が長子相続制に転ずるにおよんで、この語は貴族の間では滅んでしまつた。

註

1. Yule and Cordier, Cathay and the way thither, Vol. I, Supplementary notes VII, p.208 (from the fragments of Menander Protector).
2. W.W.Rockhill, The journey of William of Rubruck to the eastern parts of the world, p.240, note 2.
3. リヤザノフスキー著、青木訳“蒙古法の基本原理解” p.103, 第12条。
4. W.W.Rockhill, The journey, p.9. なお訳文は妹尾韶夫氏の訳“リュブルク東遊記” p.8による。
5. ibid., p.35. 訳書, p.37.
6. ibid., p.240, note 2.
7. ibid., p.240. 訳書, p.220.
8. ibid., p.242. 訳書, p.221.
9. 田中幸一郎訳補、ドーソン蒙古史(岩波文庫版)上, p.62.
10. W.W.Rockhill, The journey, p.240, note 2.
11. ibid., p.240, note 2.
12. ibid., p.240. 訳書, p.220.
13. ガルサン・ゴンボエフ、“ブラノ・カルビニに見える古代蒙古の慣習及び迷信”(Trudy B.O.P.A.O., 第四巻, p.248-9)
14. F.A.Larson, Die Mongolei und mein Leben mit den Mongolei (高山洋吉訳, “蒙古風俗誌” p.112)
15. ボターニン“西北蒙古誌”訳書, 第二巻, p.193-194.
16. 同書, p.194.
17. 同書, p.183-184. ラルソン(高山洋吉訳, “蒙古風俗誌” p.170-172)には、火神の祭りなるものの状態をえがいているが、その場所は蒙古というばかりで、どこかわからないし、かつ大体ボターニンの伝えた拝火の行事と同様なので、ここには引用しない。なおラルソンは“火神”と称してはいるが、はたして神格化されていたものかどうか疑問である。
18. 同書, p.169.
19. 同書, p.173-174.
20. 同書, p.188.
21. ボズドニエエフ著、東亜同文会訳“蒙古及び蒙古人” p.685-686.
22. ボズドニエエフ著、東亜同文会訳“東部蒙古” p.585.

23. ポズドニエエフ著、東亜同文会訳「蒙古及び蒙古人」p.176.
24. この題についての詳細は拙稿「内蒙古ハルハ右翼旗における相続制度」(遊牧民族の社会と文化、Ⅱ所載)を参照されたい。
25. 小林高四郎氏訳「蒙古黄金史」(生活社版)p.156.
26. 外務省訳「蒙古社会制度史」(生活社版)p.366.
27. 羅馬字転写日本語対訳喀喇沁本蒙古源流、卷四、p.5.
28. 訳文は小林高四郎氏訳「蒙古黄金史」(生活社版)p.117,による。
29. 蒙古社会制度史、p.123-124.
30. 同書、p.71-79.
31. 同書、p.399.

(昭和27年10月16日受理)

SUMMARY

FIRE AND HEARTH AMONG THE MONGOLIAN

by Tomitaro AOKI

The sacred idea of fire of the Mongolian race as well as others was developed into the idea of fire as a power to drive away evil ghost, noxious vapour, poison, etc. and turned into a wish for happiness in the days of Chinggis Khan. Afterwards the spread of Lamaism caused the decline of these customs, but fire still remains sacred, because dung, the fuel used, does not burn long.

Fire, since it was used for cooking, became the centre of family life. And fire and the hearth, where fire was made, symbolized, together or alone, not only the family, but all of its kinsmen or an entire tribe.

Khalkha Paragun gar Heshigun, Banner of Khalkha Right Hand of Inner Mongolia, divides fire, when a branch family is established. And this is thought to have existed in the time of Chinggis Khan. The hearth in this case meant the things inseparable from the house in its symbolical meaning; that is, the hearth itself, tent, household property, Buddhist altar which were used by the father as head of the family and also his wives, etc.; while fire itself meant mainly cattle and the things exchangeable for them. In the days of Chinggis Khan the phrase of *odcigin* or *odjigin*, "a King of the hearth," was used to the youngest child. But originally it meant the house wife, the patriarch and, lastly, the youngest only.

In those days the Mongolians were in an early state of nomadism so that hunting was absolutely necessary for their domestic economy. Therefore the patriarch was often away from his home and the title of the king of the hearth was given to the heir presumptive, which came to mean the youngest child, as postremogeniture was then prevailing. However this phrase ceased to exist, as primogeniture became popular among the nobles.

(Received October 16, 1952)